

2023年1月29日 説教「主の山に備えあり」

列王記第二 8章 1～6節

7章は飢饉とアラムの侵略が重なり、イスラエルは大変な状況でした。その中で、アラム軍の思い違いの撤退がありました。お腹を空かせていたサマリヤの民は、安価で食料を得るといった体験をしました。エリシャの預言通りでした。8章は背景が全く異なります。時間的には、サマリヤの飢饉よりも前に戻ります。シュネムにおいて、飢饉が発生しようとしていたというのが背景です。それをエリシャは主から教えていただいていたのです。そんな出来事もあったと、列王記の記者が時間軸を戻して記しているのです。

1. シュネムの女への促し (1～2節)

①あの女に (1) 「エリシャは、かつて子どもを生き返らせてやったあの女に言った。」さて、この「あの女」とは、4章に出て来るシュネムの女のことです。彼女は預言者エリシャの為に、広い自宅の一角に働きの拠点を用意しました。彼女の貢献は、彼女のための祈りとなり、用いられて、彼女に男の子が与えられました。ところが、その男の子が少し大きくなった頃、病気になる、命を落としてしまったのです。母は憤慨して、カルメルに住むエリシャの所に出かけます。エリシャはシュネムに出かけ、死んだ少年の命のために祈りました。少年は生き返りました。エリシャが命の主の恵みによってなした業でした。時を経て今朝の箇所です。女にエリシャは言ったのです。

②飢饉が来る (1) 「『あなたは家族の者たちと旅に立ち、あなたがとどまっていた所に、しばらくとどまっていなさい。主がききんを起こされたので、この国は七年間、ききんに見舞われるから。』」エリシャの女への促しは、家族と一緒に旅に出て、ここから離れた所にとどまっていなさいというものでした。その理由は、この地に7年にもわたる飢饉がやってきて、相当の困難が押し寄せるからだということでした。エリシャは命を回復させられた少年のこともありますから、この家族の命と健康が守られるように、いつも祈っていたことでしょう。

③ペリシテの地に (2) 「そこで、この女は神の人のことばに従って出発し、家族の者を連れてペリシテ人の地に行き、七年間滞在した。」この女は信仰の人でした。アブラハムが『行け』と言われて出発したように、エリシャを通して、『行って逃れなさい』と言われ、素直に従ったのです。今の裕福な生活を考えるならば、出発を見合わせる道をとる可能性もありましたが、お言葉に従って出発したのです。そして、家族の者たちと共に、隣国ペリシテに逃れ、そこで七年間滞在することになったのです。

2. 七年がたって (3～4節)

①七年後 (3) 「七年たって後、彼女はペリシテ人の地から戻って来て、自分の家と畑を得ようと王に訴え出た。」ペリシテでのシュネムの女一家の生活については、全く記されていません。ともかく生かされて7年の年月が流れました。彼らはペリシテの地を離れ、シュネムに戻ってきました。エリシャから言われていた年月です。ところが、戻ってくると、女の一家が所有



する大きな屋敷や畑が他人に占有されてしまっていたのです。そこで、彼女はそれを取り戻すため、王に直談判しようとサマリヤに向かったのです。

②王はゲハジに (4)「そのころ、王は神の人に仕える若い者ゲハジに」。5章には、エリシャの従者であったゲハジに起きた事が記されています。アラムの将軍ナアマンがツアラアト(重い皮膚病)を癒してもらうためにエリシャの所にやってきました。最初はエリシャの言うことを拒否したナアマンは諭され、ヨルダン川に七たび身を浸し、その病を癒していただきました。そして、彼はイスラエルの神への信仰まで与えられたのです。エリシャはナアマンの用意した御礼の財を受け取りませんでした。ところが、ゲハジはこれに不満でした。偽って、ナアマンから財を引き出そうとしました。その結果、それは発覚しゲハジはツアラアトになってしまいました。こんなことから、ここで王がゲハジに接しているのは、ナアマンの出来事前と考えられます。

③エリシャの事を (4)「『エリシャが行ったすばらしいことを、残らず私に聞かしてくれ』と言って、話していた。」イスラエルの王は、ゲハジにエリシャのなしたすばらしい奇跡のわざや、愛の行動、行為について、詳しく尋ねているところでした。

3. 女の訴えに答える王 (5~6節)

①ちょうどそこに (5)「彼が王に、死人を生き返らせたあのことを話していると、ちょうどそこに、子どもを生き返らせてもらった女が、自分の家と畑のことに王に訴えに来た。」ちょうどゲハジが王に、シュネムの女の子が生き返った話しをしていた時のことです。当の女性が王の所に訪ねてきたのです。女は、エリシャの助言で長年にわたってペリシテの地に疎開していたこと、その間に自分の家や農地を奪われてしまったと、訴えるためにやって来たのです。それはこれまで読んできた通りです。

②女と子ども (5)「そこで、ゲハジは言った。『王さま、これがその女です。これが、エリシャが生き返らせたその子どもです。』」王はゲハジから話を聞いていなければ、女性の訴えを聞くことすらなかったかもしれません。ところが、ちょうどゲハジがその女性と子どものことを聞いていたところです。これ以上のタイミングはありません。『王さま、今、話していた女性がこの人です! ゲハジ自身が驚いたことでしょう。話している時に本人が目の前に現れたのですから。』

③王の命令 (6)「王が彼女に尋ねると、彼女は王にそのことを話した。そこで、王は彼女のためにひとりの宦官に命じて言った。『彼女の物を全部返してやりなさい。それに彼女がこの地を離れた日から、きょうまでの畑の収穫もみな、返してやりなさい。』」女性は王から、訴えが何かを尋ねられました。そこで、彼女は王に、飢饉で疎開している最中に、自分達の家や田畑を他の人に使われてしまっていると訴えたのです。すると、王は早速動きます。配下の宦官に彼女の土地や田畑の返却への手筈、離れた日からその日までの収穫を返す手続きを整えるように、命じたのです。事は驚くばかりにスムーズに進んで行ったのです。

《結論》

旧約聖書の歴史書の部分について、これがすべて時間軸通りに記されているわけではありません。私たちが何かを語る時にもこんなことがあるでしょう。「そういえば、それより何年も前のことだけれど、こんなこともあったな。」などと昔の話を、間に挟んで語ったり、記したりすることがあるでしょう。今朝の聖書箇所もサマリヤの飢饉より前の、シュネムでの飢饉の時代にあったことが述べられているのです。それも、あのシュネムの女一家のことであるというのですから、大変興味深いです。

それにしても当時は、あちらこちらで飢饉が発生していたようです。大変なことです。私たちに食事が与えられているということはまことに有難いことです。アフリカのソマリヤ、ケニヤ、エチオピアは今、過去40年で最悪の干ばつがあり、多くの人々が飢えつつあるそうです。栄養失調に苦しむ子供が珍しくなく、家畜は死に、ある家族は食事ができないそうです。(朝日新聞)。豊かに与えられている国がある一方、飢え死にする人々がいるということは本当に悲しく、世界は真剣に取り組み、祈りが必要です。

さて、今朝の聖書箇所においては、忠実に信仰深いシュネムの女に対する主の憐みを改めてみることができます。彼女はペリシテから戻って来た時に、自らの家が占有されているのを見て、がっかりしたことでしょう。エリシャ先生の言われた言葉に従って、疎開していたのに、帰ってみれば土地も家もとられてしまっている。普通なら、エリシャに対する不満の言葉も出てくるころでありましょう。ところが、ここでこのシュネムの女の信仰はゆがみません。かつて、男の子の命が奪われた時も、毅然とエリシャのいるカルメル山に進んでいき、預言者に訴えたことがありました。今回は、この不法占拠について、王様の所に直談判しに出かけて行ったのです。「暗いと不平を言うよりも、進んであかりをとみましょう」というのは、カトリックの「こころのともしび」に出てくる言葉ですが、この姿勢には学ぶところがありますね。不平ばかり言っているのではなく、直接に神の前に出て行って訴えをする。また、不自由なことがあり、自分にできることがあるならば行こう。シュネムの女もこのような所がありました。彼女のその信仰は用いられて、神さまは備えてくださいました。ゲハジがちょうどその女の話を話している時に、彼女が訪問するという奇跡的タイミングが与えられたのです。「主の山の上に備えあり」。アドナイ・イルエ。信仰をもって進む時に、主は備えてくださるのです。

私たちは将来のことを思い煩いやすいです。また過去のことをとりあげて、あの時にあの人がかうしたから、言ったからなどと不満を思いめぐらしたり、口に出したりします。しかし、シュネムの女のごとく主のことばを信じましょう。「世の力、迫れども、死に勝ちし主によれば、安らげき喜びは、わが胸に満ち溢る」(讚美歌 358 の 4)とあります。否定的な思いがやってくることもありません。しかし、過去のことと悔い改めるべき事は悔い改め、現在を受け入れ、将来のことを主に委ねて歩いていきましょう。そこにこそ、天来の喜びと平安が与えられていくのです。